ラつくやうである、あの時もし人目がなかつたなら母の腕に取すがつて思ふぞんぶん泣いて見たかつた。自分が小さい時からよく可愛がつてゐて、此處へ來る時は態々村はづれまで見送つて來てくれた、眉の下に黒子のある人の善さそうな祖母さんわ何うして居られるか知ら、こんな事を思ふてゐる内、何時しかうなだれてゐた顔を冷たい朝風に襲はれて、思はず身振してもたげて見れば、早天には銀河もなく、月もなく宵の明星のみ燦として輝つてゐた。

秋の夕

中三　渡邊泰深

風の息吹もない靜かにくろずむ某る黄昏であるあまりの寂莫にみたされ、何處に行かうと云ふ考へはない、只鼻の向いた方に田舍道をぶらり〳〵歩くのである。そして暮れ行く秋のさびしみと此の胸のさびしみとを同化させまうとした。

山又山の間の黄色の部分は臨終の美を誇る秋草の色である、路端の叢の中には鈴虫が調子細く〻ン〳〵となく聲が種々な秋の虫の聲がする。

何時の間にか、小さい溝の畔の蓼の花や野菊の花が咲いてゐる。

小川の水は減つてゐるが清く澄み、田の稻は風吹く毎にたもたげなる頭を垂れて、見渡す限り一面に黄金の波を漂はせてゐる。

附近の人家よりは、かまどの煙が立ち昇り、白い手拭を姉さん冠りにした乙女や、馬を引いて通る馬子など歸りを急いでゐる。

此の村の小さな工場の瀧笛が響いて、紫紺の空に星の光りが瞬き初めて秋の日は靜かに暮れて行くのである。